

蒙疆から河南へ 後編(一)

—才号演習から河南作戦前半まで—

東京都 川村 傳

昭和十八(一九四三)年、新たに発足した機動歩兵第三連隊は新編成による訓練に全力を挙げ、初年兵、古参兵の区別なく新しく配備された車両や兵器の取扱、整備の訓練を強化して、新生機動部隊としての戦力を発揮できるようにとの事でした。しかし以前のように出動の際に自動車中隊から配属の車に乗って出動という訳にはいかずその度に車廠へ駆け付け、車のエンジンをかけて中隊の点呼場まで持って来なければならなかった。

そんなこと何でもないと考えられるかも知れませんが、零下二〇度近くも気温が下がる蒙疆地区では、アンペラ張りの粗末な車廠では、屋根の下でも外と同じく冷却水を抜いておかなければエンジンを壊してしまうことになります。冷却水が凍

結すると一〇%体積が膨張して鋳物のシリンダーブロックを割ってしまう。それで不凍液には五〇%のグリセリンをいいますが、これが気圧の低い高原地帯では沸騰します。当時の車は加圧式ではないからラジエーターキャップから吹き出し、ファンに泡を飛ばされ、エンジンルーム内は黄土とグリセリンの泡とで安倍川餅のようになってしまつて始末に負えなくなります。

バッテリーも「四分の三充電」の状態ですら零下一五度以下になると凍結して電槽が割れてしまうので、一日の訓練が終わるとターミナルを外して、バッテリーを兵舎まで担いでこなければならぬのです。

「ソレ! 出動」だとすると、重いバッテリーを担いで車廠まで駆け足です。当時は六ボルトのバッテリーですから低温では効率が悪く、また潤滑油が今日のようなマルチグレードでないから粘度が高くなつていて水飴のようですから、始動転把など一人の腕力ではとても回らない。

歯輪室油（ギアオイル）は固まってゴム状になり、歯の接触面から離脱してしまつて、牽引などをして無理に回転させると、生ずる摩擦熱でオイルが溶けてはじめて潤滑の用をするという有様です。現在の密閉式冷却系統だ、LLCだ、リザボアータンクなどからは想像のつかない困難な条件下で車両を運行しなければならなかったのです。

機関の材質や切削精度も不完全で、曲軸（クランクシャフト）の軸承（ベアリング）にガタの出る車など珍しくなく、車両整備の教育の初期には故障を音で診断する訓練を受けたものです。それには当時、SPレコードに録音したものを聞かされての訓練でした。

例えば、エンジンを空吹かしして回転が下がる時「ガッ、ガッ」と聞こえるのはクランクシャフトベアリングの摩擦、細かく「カタ、カタ」と音のするのは弁管（バブルステム）と弁揺腕（ロックアーム）の間隙の過大なもの、つまりタペットのギャップの多すぎと教えられ、点火栓を短絡

せしめて（プラグをドライバーでショートさせて）消える音は、連結桿（コネクティングロッド）の大端、つまり小メタルの打音であると、また大きな音が機関の回転数に関係なく聞こえる時は、エアクリーナーを外してベンチュリーに直接オイルをプチ込み、音が止まつたら、それは圧縮洩れの音であるから「活塞環（ピストンリング）の折損か、三本の合わせ目が重なっているか点検しろ」などと教えられました。

機関の分解修理等と言うものは実に雑なもので、当時はクランクシャフトの研磨などはせず、錆込んだメタルの表面とシャフトに光明丹（酸化鉛）を塗って、当たりを見てはスクレーパーでバビットメタルを削って合わせるというのが常識でした。コンロットアライナーなどはお目にかかった事はなく、コンロットが歪んだまま締め付けてしまうので、オーバーホールを終わったエンジンのクランクはとても重く、ギアを入れたまま他車で牽引

して「当たりを出す？」なんて乱暴極まる事をや
つてのけるのです。ですから三千キロも走ると再
びメタル打音を発し分解修理となります。

当時の鑄鉄ピストンの製作精度が悪かったのか、
潤滑油が悪かったのか、シリンダーの摩擦が早く、
二万キロも走らないのにボーリングしなければな
らない車もありました。

ヘッドの締め付けボルトにボータブルのボーリ
ングマシンを取り付けて削るのですが、ホーニン
グの機械がないので、古いピストンにコンパウン
ドを塗り、コンロッドの先端に木のハンドルをつ
け、手でピストンを回転しながら上下して研磨す
るというやり方で仕上げるのですから今では考え
られない有様でした。こんな事でよく作戦中車が
動かせたなあと感じますし、また行動中に、こ
のように始終故障して修理に追われていたことを
思うと、現在世界一故障の少ない日本の車は大し
た進歩をしたものです。

戦闘訓練は戦車部隊同志の戦闘訓練ではなく、
歩兵同志の遭遇戦または陣地攻撃が主です。歩戦
連合演習と称して春から夏にかけて安北、包頭、
薩拉齋、固陽、昭君墳等の各部隊が参加しました。

そして対戦車の肉薄攻撃と言っても破甲地雷（マ
グネット）で装甲板に吸着して破壊する）や棒地雷
〔履帯と起動輪（スプロケット）の間に押し込め
ば、咬合の圧力で点火爆発して履帯を切断し走行
不能に至らしめる〕等の新兵器の話は聞いていま
したが、実際には現物にはお目に掛からず、タコ
壺と火焰瓶が現実的な攻撃の手段でした。

夏が去って直ちに河北共産殲滅作戦（秘匿名烏オ
号演習）が始まり、私も高田中隊長の指揮下に入
り山西省朔県へ出動しました。我々は押田隊と言
う愛知県の部隊が守備をしていた山の中の平魯と
言う部隊の要点にある陣地が八路軍に襲撃される
ので、新鋭の我々の機動歩兵の威力を見せて追っ
払って貰いたいと言うことであつた。我が中隊が
到着して第一に感じたのは給養の悪さであつた。

食事の質量共に貧弱で、いつ出動が掛かるか分からないのに、空腹を抱えての夜間の歩哨勤務と車両整備でした。そして碌な道路もない山岳地帯に車両部隊の行動は束縛され、スピードと行動距離が本領の機動部隊も形無しでした。

そして第一に目指す八路軍に遭遇しないのですから戦力の発揮もできない。八路軍はこの山間地の貧しい農民の心を完全に捉えていて、「奪わず犯さず」で農繁期には農業の手助けまですると言うのですから、ただでさえ不足気味の農産物を、紙片同様の軍票で奪い取る日本軍に、農民は八路軍の情報など流す訳はないのです。こちらも懐柔策に出て、塩や小麦粉などを餌に農民から情報を得ようとしても、相手が餌が欲しくて流す情報は、いつもタイミング外れの空ぶりに終わるものばかりでした。

遭遇する筈の地点を射撃できるよう陣地を構築して、寒さを我慢して夜通し見張っていても、目指す敵は現われず、夜露と山の冷気で冷えきった

体で駐屯地に帰る挫折感は後味の悪いものでした。

たまに確度甲の情報で夜間出動すると、鍛冶屋が外で仕事をしている。鼻をつままれても分からない闇夜で仕事ができないだろうと思うとさながら、農具の修理か何やらやっている。鞆で爐に風を送る度に火の粉が空中に舞い上がる。二キロも行軍して前方を見るとはるか彼方でも同じように火が見える。四キロ以上も離れた部落で同じ夜に鍛冶屋が夜業をする訳はないのだろうか、これは「日本部隊が出動したぞ」との合図の狼火に間違いない。

と気付いた時はもう後の祭り。隠密行動で闇の中を擲弾筒の重い榴弾をブラ下げて山道を躓きながら這い上がり、目的地までやっと到達すると敵は藻抜きの殻である。白々と夜の明ける頃には昨夜の苦しい行軍の疲労と、期待を裏切られた落胆とで士気阻喪甚しく、何のためにこんな苦勞をと考えさせられる事でした。

二カ月近くも努力して敵の姿を見たのは一回だ

け。はるか千五百メートルも離れた山の尾根を望遠鏡で見ると、馬を引いてのんびり移動して行くのが見えただけで、陽は西に沈みかけているし、着弾距離内に進出するには幾つか谷を超えなくてはならず、夕闇迫る中で指を銜くはえて見ているばかりでした。

こんな事で戦果も挙げられず、また朔県から車両を貨車積みして包頭經由で安北に帰ると、安北の西北二十キロ位の督励山付近の戦鬪で中隊幹部の斎藤軍曹が戦死しておりました。後で聞いた事ですが、我々が援護に行った平魯の部隊も、我々が去った後敵襲を受け全滅に近い損害を被ったとの事でした。

昭和十八年も暮れる頃から次の作戦の噂が囁かれるようになりました。軍隊という所は情報統制の酷しい社会で、外部から隔絶されているだけに情報に飢えており、取るに足りない噂でも口から口へ素早く伝わり、兵隊の慰めになるのです。

「流言蜚語は信念の弱きに生ず云々」と戦陣訓にはあるが、絶海の孤島のような砂漠の駐屯地では、包頭の師団本部や旅団本部あるいは無線室勤務に派遣されている下士官や兵から、兵が被服の交換等で行って聞いて来た兵が噂の源であろう。これは確度甲とか乙とか勝手に格付けして吹聴する。これに尾鰭がついて大本営陸軍部発表のごとき情報が出来上がる。

「どうも南方へ行くらしい」と言う噂が出たのは昭和十九年になってからで、防蚊面とか防暑衣袴が中隊の被服庫に入ってからである。それに医務室にキニーネが多量に入ったとか言う事になると南方へ移動の風評は確実と皆考えるようになった。

しかし内地から来た補充兵の様子を見て一抹の不安があった。補充兵の中には三十歳を超えている者も多く、その年寄り染みて見えること、また体格も貧弱で、騎兵時代に入隊した我々に比べると子供のようで、着剣して直立不動の姿勢をとる

と頭より剣尖の方が上に出る。劍鞘も木の代用品、銃も剣も工作の仕上げが粗雑で、内地の工業水準の低下が窺われるようなものでした。我々三年兵がこの補充兵を一人前の兵に育てて一緒に戦闘をやらなければならぬと思うと、何だかズシリと重い荷物を背負わされた心地がしました。

三月に移動を開始し、包頭から車両、砲等を貨車に積み、北京に出て更に南下し、石家荘で下車、久しぶりに電灯のある兵舎に入りました。そしてここで三カ月分の給与の前払いを受け編成を終了しました。この時初めて連隊長から河南省の作戦の事を知らされ、完全八個師団、関係十個師団の大作戦である事を知りました。

石家荘を出発し、新郷で降り、近くの部落に車両を偽装して夜を待つ。日暮れに出動命令が出て、各部落から灯火を消した車両が街道に集まってひしめいている。高速道路の渋滞のように一寸刻みに前進し、傍らの道から本道に入って来る他の部

隊に割り込まれないよう、交通整理の部隊の指示に従って進むが整然とはなかなか行かない。途中渋滞で止まっている内にエンジンが掛らなくなつて落伍する車、本隊に遅れて追及する車等がある。我が師団の車だけでも二千車両と言うのだから混雑は大変なものだ。

大した距離でもないのに数時間かかり、やっと渡河点に達すると、すぐUターンして元の部落へ戻り、夜の明けぬ内に車両の偽装を完了して、街道から部落までの轍痕を消して敵の偵察機の眼に触れぬようにしなければならぬ。路面の軟弱な所はタイヤやキヤタピラの痕がかなりハッキリついていて、土をかけた草を撒いたり面倒な作業でした。やつと終わって、食事の用意をするにも、なるべく煙を出さないようにとの注意があるが、なかなか思うようには行かぬ。仮眠、車両の整備を終了する頃には夜になります。

闇夜に一回の演習では道路の勝手もよく分からないが、いよいよ本番となり、四月十八日仮橋を

仏暁に渡りはじめました。渡り切るには四十分はかかると聞いて、その間に敵機の爆撃や対岸の敵陣地からの砲撃に会ったらどうなるか、覚悟を決めて渡りはじめた。眼下には雪解け水か黄色の濁流が渦巻いて、橋桁はギーンと音を立てて傾く。脱輪すると全部隊の渡河に重大な齟齬を来たすので一生懸命「操向転把」にかじりついて、対岸に到着した時は暑くもないのに汗ビッシヨリとなりました。

霸王城へ進撃の命令で道のない所を走り出しました。地雷の存在は地雷探知機で判明しても処理する時間がないので至る所に三角の赤い小旗の標識が立ててある。雨は降り出し視界は悪しで、薄氷を踏む思いでしたが、運よく大した抵抗にも会わず鄭州まで進出しました。この間の渡河と地雷原を通過した緊張は今でも忘れられません。

五月一日、鄭州を後に洛陽目がけて許昌から西へ向かって春の河南を進み、白沙鎮付近の緩やか

な上がり坂で長い渋滞の列につく。ここで車を止め小休止となり、前後の車の操縦士と雑談しました。天気はよし、青々とした野や畑を見て、そろそろ昼飯にでもするかと言っていた途端、ダダーン！ と大きな音と頭上を弾がかすめる。「敵襲！」と、後部の銃架から銃を外し道路傍らの溝に飛び込み銃を構えました。その時三十メートル位の超低空を暗緑色の胴体に鮫のような絵を画いた二機のP38ウオアホークが飛び去りました。

この間、僅か数秒である。我々はテッキリ前方の稜線あたりの陣地から撃たれたと思ったのに戦闘機の機銃掃射であったとは、反復攻撃を警戒したが二度と来なかったのは幸いでした。恐らく高空から渋滞を発見し、地上から発見されぬよう超低空で我々を襲ったものであろう。爆弾を落とされなかったもので車両の破壊は免れたものの、小隊の大友上等兵が大腿部に大口径の弾丸を受け、シヨックと大量出血で即死状態であったとの事でした。これで機動部隊は制空権のない地域での昼間

行動は危険な事を知らされました。

次いで郊外を攻略、中隊からも数人の戦死者や負傷者を出し、掃蕩を他部隊に委せ、ひたすら洛陽目指して前進しました。臨汝付近の麦畑の一本道を前進中、前方から突如、自動火器の猛射を受けました。私の車は二車両目で、前の車の兵が一斉に下車する間に同年兵の三浦上等兵が即死、数人が負傷する。矢部小隊長が直ちに大隊本部に行き、掩護して貰うよう連絡に行くと命ぜられ、私は三百メートル後方の大隊本部目掛けて麦畑の中を車を走らせたので敵の好目標となりました。

敵は麦畑の中を時速十キロでヨタヨタ走る車に一斉に射って来る。敵に背を向けて走るのがこんなに恐ろしいものとは知りませんでした。車の両側の麦の穂が敵弾でパッと飛び散っているのを見ながら、我が愛車トヨタGB型トラックは敵を躍り超えを繰り返しつつ大隊本部に到着、伝令の任務を果たした。後で車体を点検したが、恐らく五百メートル位の距離から撃たれたのほとんど

弾痕が無く幸運でした。

五月五日午後、遂に洛陽の南方の竜門に到着、分隊は下車して山に向かつて前進、我々操縦手と助手は車両を散開して掩護を掘り偽装しました。ちよど連隊本部の輿水少尉が通り掛り、同年兵で二年ぶりの再会でしたが、輿水少尉は「おい、いよいよ凄い戦闘になるぞ」と言い残して颯爽と山に向かいました。山の向こうは目指す洛陽である。

敵も我々の急速な作戦展開に驚いて、急遽洛陽防衛の陣地強化中であるとの情報でした。しかし気になるのは機動砲兵が到着していない事でした。砲の掩護なしに大きな戦闘ができるのか？ 山の方ではしきりに敵の迫撃砲弾の炸裂音や味方の重機関銃の音がする。

やがて我々空車の自動車手にも前線へ追及の命令が出ました。すぐ二、三キロ前方で中隊は苦戦しているのです。水と携帯口糧を背負って暗い山

道を這い上がりました。そして明け方中隊が取り付いている山の稜線に到達しました。昨夜は二度も逆襲があつて手榴弾戦で撃退したとか、左の方を見下ろす斜面では西宮中隊が何度かの突撃も効を奏せず、遂に全滅したと、皆土にまみれての二日間の不眠不休の戦鬪に疲労の色が見えていました。

稜線の二つの重機関銃は絶えず点射をしているが小銃を撃つ者は誰もいません。敵の機銃弾は前面に五メートルの稜線があるせいか、伏せている我々の頭上五十センチか一メートルを飛んで行くやがて敵の迫撃砲が吠え出しました。右前方に陣地か観測点があるらしい。弾着で弾道を修正して射つて来るので山岳戦では威力がある。恐ろしいのは口径が八ミリもあり発射機構が単純で、撃針一本と言うのだから打ち上げ火花よろしく一分間に十発でも十五発でも発射できる。

これはたまらんと、せめてタコ壺でもと思うが、砂利混じりの岩山では十字鍬でもなければとても

掘れない。稜線から数メートル下がった所にある深さ五十センチ、幅三メートル位の凹地からY兵長の声が出る。「おい川村、ここにもう一人位入れるよ、這つて来いよ」と言われ「やれ、有り難い」と約十五メートルの間を這い出しました。弾丸が頭を掠める度に首を竦め、あと五メートル位と言うところで反対側から補充兵のSがその凹みに入るのが見えました。

「仕舞つた。先を越されたか」と残念ではあつたのですが、あの凹みに三人は無理だと諦め、渋々先刻陣取つていた場所へ這い出しました。数メートル這つてやや凹んだ所で一息ついた途端、背後で物凄い炸裂音がして爆風と砂利が飛んで来ました。頭と背中を殴られたような衝撃が走つたが幸い出血はないようでした。向こう側にいる島村上等兵に「Y兵長はどうした」と大声で聞いたら、彼は這つて凹みを覗いて私の方に向いて首を振つた。

迫撃砲弾の直撃で、擲弾筒手だったY兵長の弾

囊の中の榴弾が誘発して大爆発を起こしたのであろう。後で行って見るとY兵長の姿はなく、土と砂利と人間の破片がグチャグチャに飛び散り、切れぎれになった被服がブスブス煙りを上げている中にSの首がまったく無傷で転がっていました。圧力で一度に出血した故か黄色い血の気のない顔色で、目も口も閉じ平かな顔付きであったのがせめてもの慰めでした。彼は数秒の差で私の身代わりになってくれたのです。

やがて待ちに待った我が砲兵の掩護射撃が始まりました。後方の山の麓の方で発射音がしたと思ふと『シュル、シュル』と頭上を飛んで行く砲弾の音が聞こえ、ダーンと敵陣で弾着の炸裂音が聞こえる。何とも心強い感があり士気も昂揚し、敵からの弾丸もやや勢いが衰えて来た。突撃前に負傷者を患者収容隊へ護送する事になり、中隊長から命令され私以下五人、N、T、Z、Aが胸部に重傷を負ったI上等兵を担架に乗せて、昨夜上がつて来た路を後退することになりました。

昨夜は闇の中を這い上がって来たので敵に見られなかったのですが、そこは山壁の複雑な地形で、敵味方の陣地も入り乱れているところです。中隊の第一線から約二百メートル下った所が急な崖になつており、足場を確保しながら手渡しで担架を下へ下へと降ろし始めた途端、急に迫撃砲の砲弾が近くに落下し始めました。

恐らく敵の観測所から丸見えなのだろうか、挾又法で弾道を修正しつつ正確に射って来るようになりました。早くこの地点から脱出せねばと気は焦るが、急斜面でなかなか思うようにはならない。

ヒュツヒュツと飛んで来ては凄い音で炸裂するが、一瞬、至近弾が炸裂し、何か弾力のある空気の流れで強力に持ち上げられるように爆風で地上に叩きつけられ意識を失ったのです。

何分か経ったのか急に辺りが騒がしくなつたと思つた時、ちょうど深い飛び込み用のプールの底から浮き上がる感覚のように意識が戻った。人間の意識の回復は聴覚からだ実感したものです。

しかし現場は修羅場である。幸い担架上のIは無事だが、Tは肘上を負傷し痛みとショックで跳ね回っていて手がつけられない。仕様がなから胸倉をつかまえて横面を殴りつけ「しつかりしろ」と怒鳴ったら温和しくなったので、三角巾で圧迫繃帯をして降ろさせました。Aは下から砲弾の破片を受けたのか鉄帽が転がり、頭部の出血が甚だしく、脳が飛び出し、俯けになって血泡を吹き、呼吸はしていたが動かせない重傷である。

ZにAの番をさせ、Nと二人で担架を担いで患者収容隊に辿りつきAを収容してくれるよう頼みました。軍医は双眼鏡で眺めて「ああ脳損傷だから動かせん、駄目だ」といとも簡単に診断しました。人間の生死がこんなにも一瞬の間に決定するとはショックでした。Iは別れ際に「どうも有難うございました」と丁寧に礼を言ったがとても寂しそうで、後髪を引かれる思いでした。

成績優秀な自動車兵として一選抜の上等兵になり知的な感じのする男であったが、その夜の内に

息を引き取った。夜私は空車の運転台で何とも救いのない悲しみを味わいました。

温和で親切だった一年古参のY兵長、私の身替わりになってくれたS、私が引率して行って死なせてしまったI、黙々とよく働いてくれて死んだA、大学時代に空手をやっていたとは思えないデリケートな感じで仲良かったK伍長、たった一日の間に多くの貴重な生命が失われた事を思うと、一体何のためにこれらの人々は有望な将来を犠牲にしなければならなかったのか、こう考えると昨夜からの疲労困憊にも関わらず妙に頭の一角が病的に過敏になった感じで、輾転反側して暁を迎えた。

翌日、中隊は帰って来たが人数は少なくなり、中隊長以下皆格段に年が老けた感がありました。戦闘に勝ったと言う感じではなかったのです。皆戦友を失った悲しみに打ちのめされていたのです。

洛陽はもうすぐ先である。途中有名な竜門街の石窟の前で小休止をしたが、ここで仏蹟を見学す

る元気はともなかつたのです。夕刻には洛陽郊外の軍官学校の傍らに車を止め総攻撃の命令を待ちました。

洛陽飛行場からは在支米軍と思われる爆撃機や戦闘機が離陸し、これに対する我が方の高射砲陣地からの対空砲火はなかなか命中しない。洛陽内の敵の一部が西安の方面に脱出したとの情報がありまして、これを捕捉殲滅すべく我が部隊に命令が下つたのです。いわゆる洛寧の追撃戦の開始でした。

【解説】

体験記執筆者が所属する部隊は、機動歩兵第三連隊である。この機動歩兵第三連隊は終戦時、戦車第三師団「灌部隊」に属し、戦車第三旅団、戦車第十三連隊、同第十七連隊、及び機動歩兵第四連隊と共に師団を構成している。上部部隊は支那派遣軍―北支那方面軍―第十二軍で、千葉県津田沼で編成され、終戦時は北平に位置し

ていた。

体験記筆者は、この時、繰り上げ卒業で学園を去り、昭和十七年一月八日、東京駅集合、用品で貨物船に乗船、冬の玄界灘を渡り、朝鮮を経て「包頭」に下車する。この時、騎兵第十四連隊第四中隊第三小队に入隊したが、十二月には、この騎兵第十四連隊は消滅し、戦車第三師団機動歩兵第三連隊が誕生し、筆者は、その第五中隊（整備中隊）配属となる。

当時、二日間続けて盛大な軍旗祭が行われ、伝統ある騎兵第十四連隊は消滅、戦車第三師団機動歩兵第三連隊が誕生したことを記述している。筆者が所属した第五中隊は自動貨車と装甲兵車の機動力を持つ機動歩兵となつたのである。

昭和十八年、師団は駐蒙軍の隷下にあつて包頭付近の警備を担当しているが、昭和十九年春より支那派遣軍は大陸打通作戦を開始し、これ

に伴って四月に第十二軍に編入され、黄河の南岸の鄭州に集結している。

当時の兵力は戦車第八連隊、同第十二連隊はなく、戦車第六旅団に属する戦車二個連隊で、保有する戦車は約二百五十両であったとの記録がある。

当時の軍の作戦計画では、黄河南岸に集結した兵力を南に直進と見せ掛け、西部の山岳地帯の敵を東に誘導して、これを補足、包囲して、敵の主力を撃滅するにあつて、戦車師団と騎兵第四旅団がこれに当たった。

昭和十九年四月、ここで体験記筆者の体験記に詳しいが、二個の戦車連隊をもって左右から突進し、五月に臨汝に進出、以後、伊河河谷の要衝である龍門を突く。

体験記筆者が所属する機動歩兵第三連隊と戦車二個中隊が主力となって、さらに砲兵大隊が協力する形での突進が開始された。結果的には五月五日に洛陽の南方の龍門高地を占領したが、

敵の主力は西方に脱出し、完全なる補足、殲滅は不可能であった。

筆者の分隊は下車して山に向かって前進、操縦手と助手は車両を散開して壕掘り偽装する。山の向こうは目指す洛陽である。敵も我々の急速な作戦展開に驚いて、急遽洛陽防衛の陣地強化中であるというが、気になるのは機動砲兵が到着していないことである。

やがて我々にも前線・追及の命令が出る。筆者等は水と携帯口糧を背負って暗い山道を這い上がり、明け方中隊が取り付いている山の稜線に到達する。左の斜面では中隊が何度かの突撃も効を奏せず、遂に全滅した、そして二日間の不眠不休の戦闘に疲労の色が濃くなっている、と筆者は労苦の体験を記録する。

かくて師団は、次いで洛陽攻撃に着手する。敵主力の撃滅のため西方へ追撃し、長水鎮の隘路を占領して退路遮断に入る。筆者が次回に筆を進める。